

ヴェルディのバリトン～ワーグナー&ヴェルディ生誕 200 年企画②

今年はおペラ作曲家の二大巨頭、ワーグナーとヴェルディの生誕から 200 年。ワーグナーが強靱なテノールを求めたのと対照的に、ヴェルディはバリトンを活躍させました。



【バスとバリトン】

イタリアにおける声の区分は基本的に四つ（ソプラノ、コントラルト、テノール、バス）とされており、このうちバス（バス）は他のパートを支え、定め、ハーモニーの土台となる役割を担っていた。またオペラの初期の時代はバスとバリトンのはっきりとした区別がなく、バスの位置づけであっても音域が実質的にはバリトンであったりした。こうしたなか、モーツァルトがオペラにおいてドン・ジョヴァンニ、フィガロといった主役級でバリトンを際立たせたことは、当時としては極めて斬新な手法だった。

【オペラにおけるバリトンの役どころ】

伝統的にテノール（英雄や恋人）やバス（君主、高僧、老人）に結びつけられていた役柄のほかに、バリトンが主要な役に受け入れられたことでその幅が広がった。男らしさの新しい表現として、恋のライバル（エルナーニのドン・カルロ）、悩める父親（椿姫のジェルモン）、闘牛場の気取り屋（カルメンのエスカミーリョ）、好色な悪役（トスカのスカルピア）など、バリトンにはさまざまな役が与えられた。哀れみ、聡明さ、権威、怒り、苦闘、敵意、冷笑、ウィットなどさまざまな特質や、複雑な性格、深みのある人物を演じさせることができるとして、多くの作曲家がバリトンを取り上げるようになっていった。

【ヴェルディバリトン】

ヴェルディは最初のオペラ作品「オベルト」から最後の「ファルスタッフ」に至るまで、多くの重要な役をバリトンに与えている。それらの作品でバリトンに与えた音域はほかの作曲家のオペラ作品のそれよりやや高い上、胸声で歌うことが要求される。その一方、バリトンに与えられた役は人間的に複雑な面を持つものが多い。そのため、ヴェルディ作品を歌い演じるバリトン歌手への尊称として「ヴェルディバリトン」という言葉が今日用いられることがある。

彼の出世作となった「ナブッコ」の主役を初演したジョルジョ・ロンコーニは、明るい高音域と表現力に富んだ中音域をもつ、異色のバリトン歌手だった。彼のような声をヴェルディはその後の作品でも求めていたのではないかとされている。またヴェルディは手紙のなかで、「洗練された声の技術よりも、生気ある力強い言葉の朗唱と舞台上での生き生きとした存在感のほうが重要である」と述べており、オペラのドラマ性を表現できる歌手を求めていたことがうかがえる。

【ヴェルディのオペラを聴く】

「ナブッコ」ヌッチ（Bar）オーレン（指揮）アレーナ・ディ・ヴェローナ DVD1082

「リゴレット」ガヴァネッリ（Bar）ダウンス（指揮）コヴェント・ガーデン王立歌劇場 DVD1194

「ファルスタッフ」マエストリ（Bar）ムーティ（指揮）ミラノ・スカラ座歌劇場 DVD359

「ドン・カルロ」カブッチッリ（Bar）カラヤン（指揮）ザルツブルク復活祭音楽祭 DVD1095-96

最近受け入れた新刊・新譜から、おすすめの資料をご紹介します♪



【音源資料】

『三善晃：唱歌の四季、高田三郎：水のいのち、上田真樹：夢の意味、石井欽：風紋』

飯森範親（指揮）、東京混声合唱団、東京交響楽団 請求記号：3N8.59

朧月夜、茶摘みといえは、子どもの頃によく聴いた懐かしい調べ。三善晃によって合唱に編曲された5曲の唱歌は、あの頃聴いた音楽をさらに優しく、温かく感じさせる。合唱曲の定番である高田三郎の「水のいのち」や、若手作曲家の上田真樹による「夢の意味」も美しく、石井欽の「風紋」は収録曲唯一の無伴奏曲として合唱の声の魅力を引き出している。日本語の合唱曲を堪能できる一枚。

『シューマン：交響曲第2番&序曲集』

ヤルヴィ（指揮）、ドイツ・カンマーフィルハーモニー・ブレーメン 請求記号：6A3.10

指揮者のパーヴォ・ヤルヴィとブレーメンを本拠地とするドイツ・カンマーフィルによる、2009年から録音が始まったシューマンの交響曲全集シリーズの2作目。今回は交響曲のほかに序曲集も収められている。なかでも「マンフレッド」序曲は、指揮のヤルヴィの熱意が溢れる演奏。付属のブックレットにおけるインタビューでも、この曲に対する思いを語っている。シリーズ1作目は交響曲第1番と第3番が収められており、こちらも所蔵あり（請求記号：5A9.44）。あわせてどうぞ。

【図書】

『ドビュッシーと歩くパリ』中井正子 アルテスパブリッシング 請求記号：6.6-N145-12

ドビュッシーの足跡をたどりながら、パリの街を紹介している一冊。街並みを写した数々の写真と、10代からパリに慣れ親しんでいるピアニスト中井正子の文章が心地よい。まるで、のんびりとパリの街を散歩しているような気持ちになれる。付録のCDでドビュッシーのピアノ曲を聴きながら、街歩きを楽しんでみてはいかが？ドビュッシーもこの景観を日々眺めながら作曲をしていたのだろうかと思いを馳せながら…。

♪はじめてクラシック♪

今号からの新コーナー。クラシック音楽って敷居が高そう…興味はあるけれど、何を聴けばよいのかわからない…そんな方にも楽しんでいただけるような資料をご紹介します♪

ヴィヴァルディ作曲：『四季』 請求記号：G55.4 (LP)、1E6.43 (CD)

『四季』という通称で親しまれているが、ヴァイオリン協奏曲集「和声と創意の試み」第1集のなかの第1番～4番にあたる。イタリアのヴェネツィアで活躍したヴィヴァルディは、自身がヴァイオリン奏者でもあった。聴いてみると…あれ？学校の音楽の授業、コマーシャル、BGMなど、どこかで聞いたことのある音楽なのでは…？作曲家の諸井誠はヴィヴァルディの音楽について「軽やかで、ちょっぴり通俗的で、生き生きしており、明快である」と評し、指揮者の山本直純は「もし彼が今の世の中に生きていたら、映画音楽作曲家、テレビの音楽家としてたいへんな活躍をしたかもしれない」と語っている。心がときめくような音楽をぜひ楽しんで♪

参考資料：諸井誠『これがクラシックだ：音楽入門決定版』音楽之友社 1977/山本直純『CLASSIC CLIMAX』主婦の友社 1988